

レポート・第25回日本李登輝学校台湾研修団

多くを教わった刺激的な五日間

作家 村上天知子

第一日 五月十九日(木)

台北は雨模様。松山空港に着くと、羽田発の本隊が乗った飛行機は定刻より早く到着、とある。ロビーにおられた現地集合の方々とご挨拶し、名刺交換。李登輝学校は今回初めてだが、本当に全国各地から参加されている。

ゲートに、同便だったらしい日本の国会議員や官邸関係者が現れた。もちろん今回の総統就任式に関連しての訪問だろう。日台関係が大きく動いているのを、早くも目にした気分だ。

ほどなく参加者一同がそろい、スタッフの杉本拓朗さんが点呼を取り、アテンドの李太太さんがバスに誘導。李登輝元総統の特別講義を受けるため、

一路、慶泰大飯店へ。ここで成田発の方々と合流。第二十五回日本李登輝学校台湾研修団は、石田芳博団長、清水志摩子副団長以下四十一名である。

元総統をお待ちする間、スタッフの早川友久さんから、今夜のレセプションと、翌日の就任式の注意があった。配布書類の「空襲があった場合は」という一項に、台湾が絶えずこの緊張の中にあることを実感。

李登輝先生が到着された。お身体を悪くされていたと聞いたが、晴れやかなお顔を拝見し、少しほっとする。

お話のテーマは「指導者の条件」。総統就任時、孤立無援だった自分に道を示してくれたのは信仰だった。指導者は孤独に耐え得ねばならない。蔡英文

新総統が、勇気を持って新しい台湾を引っ張っていつてくれることを期待する。いま国際社会には指導者がいなくなってきたが、日本はアメリカに頼れなくなってきたとき、どうするのか。一気に語られるのを聞きし、台湾の新しい門出にあたり、日本人として出来ることは何なのか自問する。

質疑応答の後、一人ひとりと記念撮影。お見送りの後、我々は外交部主催レセプションに向かう。総統府の前の通りには、中華民国旗と共に、台湾と正式な国交のある国の旗が掲げられていた。その多くの旗の見慣れなさは、台湾の置かれている、いびつな国際状況そのものだ。

会場の台北賓館は、もともと台湾総督官邸として一九〇一年に建てられ、一九二三年には、摂政宮裕仁親王殿下も滞在された。百年以上の間、この建物は台湾、いや、アジアの動いていく様を見続けてきたわけだ。この瞬間にも、歴史の流れが生まれているのか。

様々な国や組織を背負う人々が、グラスを片手に談笑するのを見ながら、そんなことを想った。

この日は流れ解散。それぞれ淡水の成旅晶賛飯店にチェックインする。

第二日 五月二十日(金)

快晴。就任式式典参列のため、最寄り駅の紅樹林駅から、MRTで台大醫院駅へ。總統府前の広場にはステージと客席がしつらえられ、空中には原住民の各部族を表した人型のバルーンが浮かんでいる。我々は前方のエリアに着席。やがて巨大なモニターに、宣誓式の様子が映し出された。軍楽隊の演奏があり、原住民から今日までの「台

湾史」が劇仕立てで語られる。ひまわり運動のテーマソング『島嶼天光』の歌詞「勇敢的台灣人」に拍手。

国歌斉唱の後、蔡英文新總統の就任演説。お祭りムードの中、浮ついたものがない、静かな覚悟を感じさせる五千三百六十四字。最後は、禁歌だったこともある『美麗島』の大合唱。

終了後、昼食を雙連駅近くの千采というお店でいただきながら、演説の抄訳と解説を伺い、式典の感想を皆で語り合う。劇で二二八事件に長く時間を取っていたことに注目する方が多かった。また、台湾を主体として歴史が描かれたのは、画期的なことだという。

午後は映画館・秀泰影城に移動、映

画『湾生回家』を鑑賞。今回参加されている、花蓮出身の清水一也氏が主要人物の一人。湾生とは、一九四五年までの五十年間に日本統治下の台湾で生まれた日本人のこと。故郷。故国。日頃から考えていたはずのテーマだが、まだまだ自分は浅い。日本では十一月

十二日より岩波ホールで公開される。

第三日 五月二十一日(土)

野外研修。目的地の新竹までの約一時間半のバス移動の間、順番に自己紹介をしていく。拉致問題などいろいろな話題が出て、『ふるさと』を皆で合唱したり。こうした関わり合い自体がまた、研修の一環なのだと納得。



李登輝先生の特別講義（5月19日）



台北賓館でのレセプション（5月19日）



總統就任式で228事件を伝える（5月20日）



石田团长と楊根棟先生（5月21日）

まず新竹市庁を訪問。李妍慧市議らが迎えてくださる。市庁舎は一九一八年、日本人建築家によって建てられた美しい煉瓦建築。ガイドの苗澤田氏から細やかな解説を聞く。帰りがけ、にこやかな若い女性にご挨拶すると、それが副市長の沈慧虹氏で、一同驚く。

近くのホテルで昼食。桜守の楊根棟先生から、今では二十万人の花見客が新竹を訪れると伺う。日本李登輝友の会からも桜を寄贈し、毎年ツアーも催行されているが、ぜひその季節に再訪したいものだ。

食後は、あいにくの雨の中、旧大溪神社跡、武徳殿などを見学。その後、老街をしばし自由散策。バスで台北へ戻り、中山駅近くの天厨館で夕食。

第四日 五月二十二日(日)

本日は李登輝基金会で九一日講義。

第一講は李明峻先生。「安保法制と日台関係」。台湾の地政学的な意味とその役割を説かれる。安倍首相の「自

由と繁栄の弧」に基づく安保法案は、アジア太平洋地域の安全と平和に寄与するもので、中国の現状変更の試みはそれへの挑戦。蔡総統の「現状維持」の主張の意味もそこにあるという。現在、多くの人が自らを「台湾人」と考えているが、若者はその傾向が顕著であり、財政的に圧倒的に不利だった民進党が勝利したのは、それが影響したとも。一方、東京大学では軍事研究が禁止で、安全保障の研究は不可というお話には、頭を抱えたくなった。

第二講。ロバート・D・エルドリツギ先生。「尖閣と日米台関係」。ご自分の著作の紹介から、沖縄問題・尖閣問題の起源、日米台それぞれが採るべき政策を解説される。南シナ海の沿岸諸国との連携、実効支配、情報発信は急務であり、尖閣資料館を石垣に建設するべきという提案も。現場を知り、研究された方の指摘は鋭い。日本人が知るべき歴史的事実は、まだまだあるのだと再認識。

第三講。迫田勝敏先生。「これから台湾と蔡英文政権の課題」。先生は「蔡英文船長の台湾丸」と表現。蔡政権は安定政権ではあるが、馬政権の負の遺産をどう整理していくか。深化する対中依存の解消と経済再建が課題。そのためにも「国際生存空間」を確保していくことが重要という。日本との関係はいま最良の状態だが、その裏には、中華統一促進会や国民党などの様々な動きもあり、楽観は危険というお話も。自分の頭の中で、就任式当日の晴天と「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」という言葉が重なった。

講義後、教頭の王燕軍先生から修業証書の授与と記念撮影。修業といえど、ここから考え、学び始める機会をいただいたのだと、身の引き締まる思いがする。

夕食は、松江南京駅近くの紫都という店で、新しい台湾料理に舌鼓。王先生や台湾スタッフも加わり、最後の夜ということ、盛り上がる。

第五日 五月二十三日(月)

最終日は、交流協会台北事務所に向

う。まず、沼田幹夫代表から「日台関係の現状および今後の日台関係について」。近年、台湾人の対日好感度は上がっているが、最も影響力を持つ国としては、中国、ついでアメリカがあり、日本は限定的だという。日本はもつと信頼に足る国にならねばならないが、永田町と霞が関は北京を向いている。国民の声が日台関係を良好に導いたので、ますますそれを盛り上げていくことが重要だと、代表ならではの裏話も交えて話された。今、蔡政権は広く支持されているが、二〇一八年に地

方選挙も控えており、国民の生活実感が改善されなければ、民進党政権は長続きしないというお話も。

そして、最終講義は、蔡焜燦先生の「老台北放談」。横須賀の料亭「小松」が火事で焼失してしまったニュースから、戦艦三笠、「敵艦見ユ」、宮古島、山本五十六、笹川良一、花札、米内光政、本間雅晴、宮城道雄、霞月楼、三船久蔵、……話題が次から次へと花が咲くように展開する。先生が復刻された、母校の清水公学校しみずこうがっこうの副読本『総合教育読本』が皆に回され、昭和七年のロサンゼルス五輪の際の歓迎歌『勝つて戻れば』を先生が朗唱される。ロサンゼルスロサンゼルスの、青空高く

揚げた日の丸、世界を照らす
日本よい国、これから開く

吉野桜は、まだ蕾

七つも金メダルを取った日本チームを称え、日本の将来を言祝ぐ歌詞。今の日本への、先生からの叱咤激励とも受け取れる。洒落なお話の中に日台の歴史が浮かび上がる、先生の語り口に酔った。

記念撮影、食事の後は空港へ。名残惜しいが、再会を約して解散。多くを教わった、刺激的な五日間だった。

最後になりましたが、先生方、関係者及びスタッフの方々、そして、ご一緒させていただいた参加者の皆様に、深く感謝申し上げます。



エルドリッチ先生（5月22日）



迫田勝敏先生（5月22日）



沼田幹夫先生（5月23日）



蔡焜燦先生（5月23日）